

日本推理小説精選評論集

教養としての殺人

権田萬治編

としての殺人

権田萬治編

蝸牛社

教養としての殺人

—日本推理小説精選評論集—

定価一八〇〇円

編者 権田 萬治

発行者 荒木 清

発行所 蛸か牛ぎゅう社しゃ

東京都練馬区南大泉町 30—3
電話 (〇三) 九二四—四九一一
振替口座東京九一六二七六八
印刷・浩文社製本・イマ牛製本

© MANJI GONDA 1979

推理評論の可能性を求めて

権田 萬治

ひとびとが分析的知性と呼んでいるものがあるが、これを分析することは、ほとんど不可能である——とは世界初の推理小説であるポーの『モルグ街の殺人』の冒頭の言葉だが、分析的知性の文学的結晶ともいうべき推理小説に関する研究評論が質と量の点において推理小説自身の成長、発展よりもかなり立ち遅れている理由の中には、このように分析的知性の分析がもともと困難であるという本質的な問題が横たわっているのかも知れない。

人間に対する謎の問いかけは、すでに紀元前のスフィンクスの神話にもうかがうことができる。通りかかった人々に、朝には四本足、昼には二本足、夜には三本足で歩く動物は何か、と問いかけ、謎に答えられない者をさらって行ったスフィンクス。

その答えは、オイディプスによれば、四つんばいの幼い赤ん坊の時代から、杖をつく老境までを生きる人間のことなのだが、この神話の中に、すでに人間が太古の昔から、謎解きという知的分析に関心を抱いていたことが示されている。いやそればかりでなく、謎は恐怖に包まれるときその神秘的輝きを倍加することがはからずもこの神話に暗示されているのである。なぜならスフィンクスの謎に答えない人々はどこかに連れ去られ、生きて帰れないのだから。

このスフィンクスの神話に登場する死の影を背負ったオイディプスの姿に探偵の原型を見るボワロー・ナルスジャックは、推理小説を謎と恐怖の弁証法と呼び、両義性の文学と名付けた。

私の見るところ、推理小説の批評、研究、評論の難しさは、まさに推理小説のこの文学的両義性の中に横たわっているのである。

推理小説の持つ独自の謎解きの魅力を分析しようとすると、人はしばしば人工的なトリックの統計分類学に陥ってしまう。また、逆に、推理小説の登場人物や文体などに秘められた作者の文学的肉声に耳を傾け過ぎると、今度は一般の文芸評論の中に解消されてしまう。推理評論の困難さはまず第一に、このジレンマの中にあるといつてよいであらう。

推理小説に関する研究評論が実作に比べて甚だしく立ち遅れているもう一つの理由として、欧米はもとよりわが国においても、推理小説の文学的価値が低く見られて来たという事実を否定するわけには行かない。とくに、作者の現実体験を尊重するいわゆる私小説的伝統の根強いわが国において、人工的な謎と恐怖の世界を目指す、いわゆる戦前の探偵小説が特異な目で見られる文学的素地があったと思われる。このような特異性の分析は、拙著『日本探偵作家論』（講談社文庫に）譲るが、以上のような推理評論に課せられた本来的な困難さと、非論理性の支配する独特の日本の私小説的風土の中で、どのように推理評論の試みがなされて来たか、その批評的冒険の軌跡を跡づけ、その可能性を探ろうというのが、本書『教養としての殺人』のねらいである。

推理小説評論のアンソロジーの試みとしては、鈴木幸夫編の『殺人芸術』（荒地出版社、一九五九年）があるが、これは海外のものが中心で、同書に収録されている十八編の内、日本のものは、佐藤春夫の「探偵小説論」、浜尾四郎の「探偵小説を中心として」、木々高太郎の「人生の阿呆自序」、坂口安吾の「推理小説論」、江戸川乱歩の「一人の芭蕉の問題」、中島河太郎の「探偵小説

の変貌」の六編に過ぎない。同書はすでに絶版になっているので、本書でも六編の内一部を重複して収録しているが、収録評論の数からいっても、またその水準の高さからも、本書『教養としての殺人』が日本の戦前戦後の推理評論の代表作を網羅したアンソロジーとしては初めての試みであるといっても決して過言ではないと思う。

といっても紙幅の制約や著作権の問題もあり、単行本としてまとめて現在刊行されているものやすでに文庫に収録されているような入手が容易なものは本書に本来収録すべき優れた評論でも、あえて割愛せざるを得なかった。都筑道夫、佐野洋あるいは、松本清張や坂口安吾の評論がそうである。また、本書では主として、推理小説の本質にかかわる原理的な探究を目指した代表的評論を収録しており、作家の推理小説作法的なものは、別の機会にまよめたいと考えて除いてある。

さて、それらの推理小説に関する優れた評論を眺めると、戦前では反自然主義の立場に立つ、優れた純文学作家、詩人が推理小説に強い関心を抱いていたことがまづうかがわれる。佐藤春夫、谷崎潤一郎、萩原朔太郎などはその一例である。これらの人々はとくに優れた詩人、文学者であったアラン・ポーの文学に強い関心を抱いており、探偵小説の文学的地位を決して低いものとは見ていないが、謎解きの性格よりも、むしろ怪奇幻想的な世界に魅力を感じていたことが歴然としている。

両義性の文学である推理小説を文学的側面から眺めるか人工的謎の面白さからとらえるかは、このように当初から推理評論の流れを大きく二つに色分けしているのである。平林初之輔、井上良夫、甲賀三郎などは文学性より推理小説の論理性を重視する立場であり、甲賀三郎と探偵小説芸術論争をたたかわせた木々高太郎や大下宇陀児、野上徹夫は、極端な文学的立場に立っている。江戸川

乱歩はいわばその両者の接点に立つ立場であるが、私も推理小説は本質的に娯楽を目指すものであるが、例外的に文学的に高い水準のものも生まれ得るという立場に立っている。

この意味で、小林秀雄、三島由紀夫、中井正一、埴谷雄高、赤木健介、紀田順一郎など、日本の知性を代表する人々のいわば他の分野からの鋭い指摘や、結城昌治、土屋隆夫、河野典生など推理作家によるいかにも実作者らしい意見や提言もまことに刺激的といえよう。

戦後の推理文壇を代表する松本清張は、いわゆる社会派推理小説によってこの世界に新しい地平を切り開いた。その功績は不朽だが、その後優れた後継者が見出せぬままこの方向は一つの壁にぶつかった。平野謙や大岡昇平の所論はこういう現状に対する新しい問題提起といえよう。

また、本書『教養としての殺人』の題名について一言触れて置きたい。推理小説にくわしい読者ならお気付きのことと思うが、アメリカの有名な推理小説の研究者ハワード・ヘイクラフトに、優れた推理小説史として定評のある『娯楽としての殺人』(Murder for Pleasure, Life and Times of the Detective Story, 1961年)という著書がある。本書の題名は、この古典的名著の題名をもじったものである。

最後に、優れた評論の掲載を許諾してくだだった作家、評論家、および遺族の方々に深い感謝の意を表したい。また、本書の編集に当たり、気鋭の評論家新保博久君の全面的協力を得た。氏には索引の作成もお願いしたが、同君の推理小説に対する純粋な情熱なしには本書は決して陽の目を見ることはなかったであろう。なお、同君と解題を担当してもらった谷口俊彦君はいずれも早稲田ミステリクラブのOBで期待される新進評論家である。

目

次

I 文学者の洞察

探偵小説小論

佐藤春夫 10

探偵小説に就いて

萩原朔太郎 16

探偵小説のこと

谷崎潤一郎 22

II 本格推理志向

探偵小説壇の諸傾向

平林初之輔 28

探偵小説を中心として

浜尾四郎 37

探偵小説の本格的興味

井上良夫 46

III 芸術論争

探偵的要素と小説的要素

甲賀三郎 72

愈々甲賀三郎氏に論戦

木々高太郎 79

探偵小説の新しき出発

中島親 88

探偵小説の芸術化

野上徹夫 97

一人の芭蕉の問題

江戸川乱歩 122

IV 推理小説作法

探偵小説の中の人間

現代推理小説の技法

私論・推理小説とはなにか

V 思索者からの提言

探偵小説の芸術性

探偵小説論

探偵小説の新領域

推理小説批判

ヴァン・ダインは一流か五流か

VI 批評の変遷

密室論

《対談》

大下宇陀児 130

河野典生 135

土屋隆夫 146

中井正一 156

赤木健介 162

埴谷雄高 180

三島由紀夫 188

小林秀雄

江戸川乱歩 190

紀田順一郎 220

推理小説論

小説の社会性

「わらの女」について

私の探偵小説観

現代推理小説の諸問題

解説

索引

大岡昇平 234

平野謙 251

結城昌治 269

中島河太郎 280

権田萬治 293

谷口 俊彦 310

327

I 文学者の洞察

探偵小説小論——佐藤春夫

さとう・はるお（一八九二—一九六四）詩人、小説家。『田園の憂鬱』『都会の憂鬱』等あまりに有名であるが、その耽美主義的傾向は大正期の推理小説界とも合致し、「指紋」「オカアサン」「陳述」はじめいくつかの推理小説的作品を残している。この「探偵小説小論」は『新青年』五巻十号（大正十三年八月増刊）に掲載されたものである。

探偵小説に興味がないこともないが、常に忙しいのと、生来の怠け癖とで読めもしないのをコッ
コッ洋書を読む根気もないので、十分の確信をもつて探偵小説の話ができる訳のものではない。殊
に探偵小説と言へば外国の作品に限られてゐる現状では。しかしせつかくのお尋ねだから卑見をで
たらめに申し述べる。

探偵小説の本質としては、論理的に相当の判断を下して問題の犯人を搜索するところにある。即
ち事件の関所をどんなふうに取り抜けるかといふところに興味がある訳だ。だからその判断は常に
最も健全な頭脳から湧出する智識の活躍の現れだ。たとひその方法が、冒險的とか、変幻出沒自
在だとか、機械仕掛の家だとか、科学知識応用だとかいふやうな種類の道具立てによつて色彩いろどられ

てゐるとしても、同じ思索力の發展に過ぎない。例へばコーナン・ドイル、フリーマン、モリソン、ガポリー等の取扱つた探偵シヤロック・ホームズ、ソンダイク、マルチン・ヒュウヰット、M・ルコックにしてもルブランの義賊アルセーヌ・リューパンにしても、それぞれに描かれた人物は、敏感な推理力や豊富な科学的知識を所有してゐる警察関係の人物や化学者や法医学者である。少くともさうした学者的の頭脳を具備してゐる者ばかりだ。だから自然、事件関係者間の智慧の切り出し工合や思索の一騎打になつて、吾々の興味を惹く、吾々の想像力は加速度を増して事件の中心へ惹き入れられる。高級な探偵小説になればなるほどその感は深い。吾々は一步毎に犯人の搜索に近づいてゐる訳だ。その場合吾々もともに探偵の一人になりきつてゐるのだ。それがまた時代とか場所とかの関係の距離が遠ければなほのことその实在性を無意識のうちに認めて、その戦慄の快感と怪奇の美に打たれる。言はゞそれらは一種の詩に外ならない。ロマンチックな感銘に酔ふのだ。

それで純粹な探偵小説といふのではないが、ドストイェフスキの『罪と罰』の主人公ラスコルニコフの殺人事件は、吾々の興味を大へんに惹く。あれはあの殺人現場の造り工合にも拠るのだから、あんなふうの建物でもなければ殺人は出来まい。

現在日本にいい探偵小説の現れないのは、建物の様式にも拠るので——建物の様式とはとりも直さず、生活の全部を象徴してゐるものだ。日本人は犯罪的にも深みのない生活者だとも言へさうだ。前に述べたほどには純粹でないまでも探偵的小説なら枚挙に^{いと}達なした。言はば犯罪小説で、こんなのは普通にミステリー・ストーリーとかファンタステック・ストーリーとか名づけられてゐる。例へば一方には、探偵小説の鼻祖と普通に言はれてゐるE・A・ポオの英語で書かれた最も戦慄すべ

き小説中の白眉「黒猫」がさうだ。この人のは別に純粹に近い三個の探偵小説がある。即ち「モルグ街の殺人」（鷗外訳「病院横町の殺人」）「マリイ・ロージエー事件」「盗まれた手紙」がそれだ。これらは、一様に大へん卓越した推理力で、それぞれ事件の解決をつけることは周知のことでもあらうから、その煩を避ける。彼の頭腦のへんに冴えてゐるには一驚を喫する。その立体的で簡勁な筆致は言はずもがな。彼の犯罪的の作品は以上のものとどまらない。「テルテルハート」にしても「アマンチエリドオの樽」にしても、ミステリー以外に十分デイクテイヴな閃きは現れてゐる。「長方形の箱」、はまた「M・ヴァルデマル事件の真相」と同様「黄金虫」に次ぐべき非常なデイクテイヴな興味を唆らないこともない。これ以外にも沢山あるが、かう書きたてては際限がない。ポオ論をおつ始めなけりやならなくなる。ポオの諸作の他の探偵小説と著しく異なるのは、そのデイクターが、常に實際的敏腕家でなく、暗鬱な詩人的なことである。この点はモリス・ルブランの泥棒が一種爽快な光明的とさへ言ひたい性格なのと好個の対照である。この種の小説の一異彩である。

ポオを言へば、更に遡つて独^{ドイツ}乙のE・T・A・ホッフマンの作品を一言するのが順序である。すこしくその空氣が稀薄ではあるが、筋の豊富多彩で個性的で芸術的な点では全く無類とも言へる。「マドモアゼル・スキュデリイ」などはいいい見本だ。鷗外先生が「玉を懷いて罪あり」と訳したのはこれだが、一読したところで無駄にはなるまい。幸ひ日本の映画会社が、これを何とか改名して既に上映したと聞くが、果してどんなものが出来たのか。また彼の「砂売り」だつて「クレスペル博士」だつて見やうによつては、神秘以外になかなかデイクテイヴなところを認められる。こ

れなどは言はば神経衰弱的直感の結果生れて来た犯罪進行の興味を多分に加味してゐるものだ、勿論多少奇矯ではあるが、人情的な餘情を含めてゐることは言ふまでもない。そのホフマンが「悪魔の煉金水」の粉本にしたと言はれるモンク・リュキスの「ロザリオ」などもくさ双紙のやうなものではあるが、興味をよるこぶ読者に読まれてよいものだ——その当時歐洲を風靡したといふのも無理はない。あれを支那に翻譯したらよからうと、私は兼ねてから考へてゐる。

かう述べてくると思ひ出すがそれは純粹な探偵小説家のものにも人情ばなし的なものがある。題は何といふのであつたか忘れたが『白衣の婦人』で御承知のコリンスの作で、船長の妻が、下女の生んだ私生児を自分の生んだ児だと言つて良人をあざむくが、その子の結婚の当時、過去の一切が露見するといふ筋だつた。多分その題は『秘密』と言つたかも知れない。諸君の方がよく知つてゐよう。さうかと思ふと、セクストン・ブレエクの諸作などのやうな全く人情的情緒などを抜きにした代数の式のやうな簡單で巧致なものもある。それからチエスタートンのもので、教父ブラウン坊さんのユーモラスな活躍物語がある。あの鋭敏さとか推理力などは、實際に他方面に於ける、警拔な機智的な大家であるだけに面白い。

例のオスカア・ワイルドの『ドリアングレイの画像』だつても、そんなにもつたいがつた作品と思はずに、探偵小説的に見れば捨てたものでもあるまい。

現代の日本にいい探偵ものはないらしい。江戸時代を背景にした『半七捕物帳』があるが、私はまだ読んでゐない。大岡政談の空氣がどれだけ近代化されてゐるか見たいものだ。

要するに一概に探偵小説と言つても、前から喋つて来てゐるやうに大別して二通りに分類される

やうだ。その一つは實際家らしい頭腦が土台になつた推理判断、もう一つは神經衰弱的直感の病的敏感による。そしてそれぞれは各自に戰慄の快感と怪奇の美とを加味されてゐる。それが最も必要なのだ。人情的なほろりとするのもいいがそれがすぎてはよくない。同じく冒險的なものは、探偵小説の未來のものではない。そんなのは悪くすると内容が空虚になりがちだ。三行も読んで行くうちに事件が見え透いてきて興味は半減され、つひには淡くなつて何もなくなつてしまふ。ことにその短篇ものに於いて然り。

探偵小説だと言つても要は文学だから矢張り美の追求が缺けてゐては駄目だ。ロマンチックな感興が湧いてくるやうなものでなければ満足を得るとは言はれない。だから道具立てが時代おくれだからつて古い作品必ずしも一読の価なしと見捨てられまい。いいものはいつまで経つたつていいにきまつてゐる。勿論、特殊な機械の据ゑつけ、科学応用の渦巻き等の時代的色彩のあるのもよい。また、古風なものもそれ相應にはよい。そこで無論読者の意表に出るくらゐな構想の奔放はあつてほしいものだ。

最後に言ふが、コーナン・ドイルのシャロック・ホームズ叢書などは、デイトイクテイヴストーリーの傑作であらう。芸術としてなかなか捨て難い立派な作品が少くない。例へば「赤毛組合」『銀行盜賊』のことのときである。

長篇探偵小説の第一章みたい、ごたごた書いて来たが、興味の中心となる問題は果して那邊にあるか、こんなものの解剖には馴れ切つてゐる読者諸君は定めし立ちどころに了解してくれることであらうからこれぐらゐで投げ出して置くが——要するに探偵小説なるものは、やはり豊富なロマ